

平成22年 5月27日現在

研究種目：若手研究(B)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19720031  
 研究課題名（和文）受容と制作のダイナミズム：新聞記事にみる川上音二郎の西洋演劇翻案  
 研究課題名（英文）Transplantation and Recognition: Otojiro Kawakami and his Adaptation

研究代表者  
 若林 雅哉 (WAKABAYASHI MASAYA)  
 関西大学・文学部・准教授  
 研究者番号：30372600

研究成果の概要（和文）：川上音二郎による翻案劇制作を研究対象とし、その受容環境との関係を中心に考察を行った。翻案劇の制作は、まずは受容環境への適応として現れるが、しかし次世代の受容の素地となっていく。翻案制作は、次世代にとって乗り越えるべき「ひとときの代用品」にはとどまらない。「歌舞伎受容層」への適応としての川上演劇のあり方と、「探偵劇」という従来は注目されていなかった様相を考察することを通じて、次世代の受容基盤を川上音二郎の制作が提供していることを明らかにした。また、翻案は制作当時の歴史的な受容のなかでは翻案としては認識されず、その役割を終えたときに翻案と認定されるという、芸術制作の認識にかかわる理論的な知見を得た。以上は、共著書・論文・講演・学会発表のかたちで公表した。

研究成果の概要（英文）：This investigation claims reevaluation of Otojiro Kawakami's adaptations of western drama in the Meiji era, especially from the point of environmental relation of production with reception. Kawakami's adaptive process, as well as any adaptations as adoptions of foreign culture, is under interrelation between receptive conditions and productive ones. Kawakami's adaptations of Shakespeare should be regarded as products of consideration and pre-calculation for reception by Kabuki-fans, not for the intelligentsia. But it is Kawakami's transplantation of western play and their penetration that arranged next Shin-geki's translated Shakespeare, as the intelligentsia desired. Kawakami's production as transplantation was under the temporal condition, but his introduction enabled next stage of development.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	480,000	2,980,000

研究分野：美学・美術史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：(1) 美学 (2) 翻案 (3) 演劇 (4) 川上音二郎 (5) 観客 (6) シェイクスピア

## 1. 研究開始当初の背景

科学研究費補助金（研究代表者・若林雅哉、若手研究（B）、平成 16・18 年度）による、作品の「翻案」（adaptation）の諸相を生態学的な「適応」（adaptation）モデルから追求した研究を継承するかたちで、制作環境と受容環境の相互交流を明治期の川上音二郎の翻案劇に探ることとした。諸先行研究は、川上の翻案劇のみならず翻案現象一般を、「ひとときの代用品」として等閑視してきた憾みがある。明治期の異文化接触において重大な意義を持った川上の翻案劇も、近代演劇史において十分な意義が考察されてきたとはいいがたい。すなわち西洋演劇移植は、川上の「翻案劇」を乗り越えるべく「翻訳劇」の成立に努力した坪内逍遙や小山内薫以降の「新劇」の功績に帰せられてきたのである。このような背景のなか、川上の翻案劇制作とその歴史的受容を再構成することで、翻案の果たした役割と意義を適正に評価するべく研究開始に臨んだ。

## 2. 研究の目的

近代以降の作品概念によるとき、翻案現象は、（オリジナル作品の）劣化コピーとして低く評価されることがままある。西洋文化との邂逅が始まった明治期のような文化接触において制作された川上音二郎の西洋演劇翻案は、移植の端緒として一定の評価を受けながらも、次世代以降の演劇活動の展開からは「ひとときの代用品」として歴史的整理をうけることが屢々であった。事実、川上音二郎の翻案劇は、のちの新劇による翻訳劇のための環境を準備しながらも、新劇陣営によって編まれる（後世の）演劇史からは、「否定的媒材」程度の価値しか認められていない（河竹（1978 年）など）。しかし、異文化接触当時の歴史的受容を考慮するときこそ、そのつどの受容層への適応をはかる翻案劇の持つ意義が明らかとなるはずである。とくに新聞記事を参照することを通じて、ごく一部の識者ならぬ一般の受容のあり方を再構成し、それによって、歴史的に翻案劇が持ち得たアクチュアリティを明らかにすること、そして、その適応措置が次世代の（翻訳劇）受容の基盤を形成していることを解明することが第一の目的である。また、翻案現象は確かにオリジナルに依存しているが、そのような比較・対照は、異文化接触のただ中であっては成立していない。上述のような歴史的再構成とあわせて、翻案の認識についての理論的考察を試みることに第二の目的である。

## 3. 研究の方法

川上による翻案劇の受容の実際を再構成し、その意義を解明するために、萬朝報、読売新聞、都新聞などの、劇評に紙面を割いた新聞記事を網羅的に調査する。なによりも、それは、一部の知識人ならぬ一般の演劇愛好の傾向と関心を明らかにするためである。新聞記事に関しては、白川（1985 年）の川上関係記事集成が公刊されてはいるが、収載されなかったものも多い。とくに、新劇経験の後に編集されたこの集成は、シェイクスピア劇翻案（明治三十六年以降）については比較的多くを収録していたが、明治二十七年以降の翻案劇に関しては未収載の記事も見受けられる。もちろん、白川が収載した記事に関しても、実際の紙面を確認せねばならない。それは、往々にして劇評は連載小説と同じ紙面に印刷されており、その内容傾向が、新聞購読者の嗜好と舞台への期待を理解する上で欠かせないと考えるからである。また、明治期の演劇関係文献はもとより、翻案現象一般にかかわる理論的著作をひろく検討し、制作と受容の相互関係についての理論的検討を並行していく。

## 4. 研究成果

川上音二郎の翻案劇を、各種新聞資料（萬朝報、読売新聞、都新聞などの劇評）調査を中心に、その受容を焦点として再構成し、分析と考察を試みた。もっとも示唆的であったのは、（従来あまり顧みられていない）明治二十七年から三十一年の時期の西洋演劇翻案劇であった。すなわち『意外』・『又意外』・『又々意外』のシリーズから三十一年の『又意外』再演までである。西洋の事情に詳しい坪内逍遙や小山内薫などの当時の知識人が西洋演劇の“本場”の上演や台詞などとの比較から、川上の翻案劇を“まがい物”として貶めていたこととは対照的に、当時の劇評は、むしろ歌舞伎の様式や台詞まわしとの比較に関心をもっていた。このことは、川上音二郎による「歌舞伎受容層にむけての適応」としての翻案劇の傾向を示しており、さらには、そのような適応現象が受容者層に実感されていたことを示している。

くわえて新聞記事の調査からは、“西洋演劇の”翻案という、従来の把握にとどまらない受容層へのさらなる適応措置を見いだすことができた。すなわち、この時期の川上演劇における探偵の活躍は、当時の探偵小説の大流行という土壌にうまく適応した趣向であったのである。明治二十年代の観客は、新

聞連載の（しかも、おおむね劇評と同じ紙面掲載の）夥しい探偵小説に親しんでいたことが明かとなった。とくに演劇愛好者が好んで購読する都新聞の芝居評の紙面には、一月の『意外』公演中には『極悪探偵中川吉之助（探偵叢話 22）』（明治二十六年十月一日号より明治二十七年一月二十一日号まで、都合九十回連載）が、また続けて『国事探偵（探偵叢話 23）』（明治二十七年一月二十三日号から五月十一日号まで、都合八十七回連載）が、二月の『又意外』公演中をはさんで連載されていたのである。スリラー趣味あるいは探偵の活躍は、このように新聞読者の興味的であったといえよう。

つまり、川上音二郎の西洋演劇翻案は、後の新劇陣営がその不徹底を批判する「西洋種」としては、当時の観客受容のなかで機能してはいない。そして新聞は、これらの劇を「探偵劇」・「裁判劇」とよび、観客もまた、その趣向を期待していた。そして川上演劇のこの趣向は、明治三十六年以降のシェイクスピア翻案劇受容の環境をも提供していたのである。三十六年以降の川上は、本格的な西洋演劇（シェイクスピア）の移植と、そのための「正劇」（音曲なしのストレート・プレイ様式）のスローガンにより、翻案劇『オセロ』（三十六年二月、東京・明治座、江見水蔭翻案）、翻訳劇『マアチャント、オフ、ゼニス』（同年六月、明治座、土肥春曙翻訳）、翻案劇『ハムレット』（同年十一月、東京・本郷座、土肥春曙・山岸荷葉翻案）を上演する。しかし、坪内逍遙や小山内薫らの知識人とは別に、新聞の劇評と一般の観客の興味は、その「歌舞伎風」にあった。実際、この時期に至っても、川上の「正劇」が音曲を伴わないことに対して、その「（歌舞伎風であるにもかかわらず）“チョコボ”（義太夫）がないこと」への不満・不審の表明が屢々みられたのである。さらにいえば、川上のシェイクスピア翻案劇の大盛況は、（川上自身はすでに放棄していたはずの）スリラー趣味と「裁判劇」の傾向によって支えられていたと考えられる。アーヴィング直伝を標榜する「法廷の場」は、シェイクスピアの名場面としてではなく、従来の「裁判劇」の系譜の上で理解されていたのである。この時期の川上翻案劇の受容の基盤を、明治二十七年当時の川上の演劇活動が提供していたのである。オリジナルとの比較が可能なごく一部の識者にとっては、川上の翻案劇は不十分な西洋演劇移植と映ったが、観客受容の実際においては、それは未だ知らぬ西洋演劇そのものであり、それ以上に、馴染みの「裁判劇」であったといえよう。川上の翻案劇制作は、受容層への一方通行的な適応に留まるものではなく、次世代の演劇を受容する環境を観客のうちに整備するものだったのである。従来の演劇史が見落として

いた制作と受容の実際を再構成することができたと考える。

このような調査を進めるなかで、「翻案」現象にまつわる受容様相（「翻案」としての認識）を考察した。「翻案」は、ふつう作品の存在論的なあり方として、「オリジナル」と対比させられる。しかし、明治期の日本のような文化接触の現場においては、そのような「比較」は起こらない。制作は、受容の現場においては、はじめ「翻案である」ことを意識されず、やがて「翻案である」と認識されるに至る。つまり、「翻案」とは、観客の知識や嗜好傾向などの受容環境の如何によって認識されるものであり、制作そのものに貼り付けられる存在論的なレッテルではないといえよう。これは、明治期の翻案劇に限ったことではなく、ひろく翻案現象一般にみることができる。たとえば、ネイアム・テイト（1652-1715）改作による『リア王』（改作、1681年）である。すでに流血劇が時代遅れとなった状況で、観客の嗜好の変化に適応するように『リア王』（初演、1606年）はハッピーエンドに改作され、その仮面を被り続けて受容されていた。このとき、この翻案制作（テイト版）が、1950年代のシェイクスピア・リヴァイヴアルまで、一般の観客には「シェイクスピアの『リア王』」として通用していたのである。テイト制作が、翻案として「認識」されるようになるためには、シェイクスピアとの比較が可能になったという、さらなる受容環境の変化が必要となるのである。川上音二郎と明治期の文化接触の場合、川上の『オセロ』は、当時の歌舞伎受容層にとっては、それはシェイクスピアの作品（正劇）であり、やがて、坪内逍遙や小山内薫の活動により、それが翻案劇であったことが「認識」されるといわねばならない。明治期の歴史的な受容経験のなかでは、作品／翻案の関係は、“オリジナル”作品と峻別される派生物という対立図式にはなかった。現在の歴史的経験から「翻案劇」と呼ばれるようになった制作は、そのつどの歴史的な受容経験のなかで変貌し続ける作品のつかの間の一相貌として現れていたのである。その束の間の相貌が、次世代の認識と新しい制作（翻訳劇）の基盤を提供していた。川上による「探偵劇」・「裁判劇」の系譜によってこそ、次世代の「法廷の場」（シェイクスピア『ヴェニスの商人』）の移植が成立したというべきである。

本研究は、川上音二郎の演劇制作を、単なる観客への適応を越えて、次の時代の環境を左右するものとして考察してきた。制作は、受容環境へとフィードバックされてもいく。そのような意味で、明治の川上演劇を、受容と制作のダイナミズムのうちに把握してきたものである。

研究成果は、論文・口頭発表・図書・学術

講演のかたちで公表した。それらの題目などは、次項に挙げた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

1 若林雅哉、「『詩学』と(その)アダプテーション」、『ギリシャ哲学セミナー論集』Vol. VII、ギリシャ哲学セミナー、査読無し、2010年3月、17-30頁

[学会発表] (計1件)

1 若林雅哉、「『詩学』と(その)アダプテーション」、ギリシア哲学セミナー第13回研究発表会、2009年9月12日、京都大学

[図書] (計2件)

1 篠原資明編(共著)、『岩波講座「哲学」07 芸術／創造性の哲学』、岩波書店、総278頁、2008年12月9日(担当部分:若林雅哉「概念と方法：芸術と諸芸術」253-255頁、若林雅哉「テキストからの展望：アリストテレス『詩学』」265-267頁)

2 若林雅哉・大越アイコ・石田美紀ほか、(共著)『宝塚という装置』、青弓社、総340頁、2009年3月28日(担当部分:若林雅哉「認識のツールとしての翻案」77-98頁)

[その他]

<学術講演> (計2件)

1 若林雅哉、「西洋演劇への視線 ——新劇前史から」、東西学術研究所第一回研究例会、2007年6月15日(金)、関西大学児島惟謙館

2 若林雅哉、「小山内薫と女形」、科学研究費補助金(課題番号21320021、研究代表者・伊藤徹基盤研究(B))「1890-1950年代日本における《語り》についての学際的研究」研究会、2009年9月4日、京都工芸繊維大学

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

若林 雅哉 (WAKABAYASHI MASAYA)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：30372600